

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

鬱フラグクラッシュャーズ 馬鹿！わからんのか！編

【作者名】

めたるみーと。

【あらすじ】

息抜きイ！

鬱クラッシュャーズになった主人公たちの話を書くつもりでした！
ネタしかないので注意してください。

イーベルのリアクターボルテックで資金稼ぎしたやつ正直に手を挙げる

鬱FLAGクラッシュャーズ 馬鹿！わからんのか！
編

「馬鹿ね……私も……」

プレシア「テストロッサは沈む。

今は亡き愛娘と、次元の裂け目へと落ちていく。

最近になってようやくわかった、愛するもうひとりの娘の瞳を見ながら。

「気づくのが遅すぎるのよ……昔から……」

母としてできることなどなかった。

そんな資格は自分にはないと思っていたから。

娘を痛めつけて、自己嫌悪し、それでもなお彼女は娘のために。

娘との日常を取り戻すために。

しかし結局は、叶わなかった。

「愛してたわ……フェイト……」

頭の中でそう呟く。

こんなことを言う資格などないけれど。

それでも、思うことだけは許して欲しいと。

落ちていくプレシアに向かって、泣きながら手を差し出す娘。

「行きましょう、アリシア……」

傍らの娘の亡骸の入ったカプセルに身を任せ、彼女は眠りについた。

「何をしている！セイバー！アックス！ボルテッカだ！」

「何!?ボルテッカだと!?」

「気は確かかランス!?」

虚数空間では魔法や魔力は全てかき消されてしまっただぞ!!!
私たちもただでは済まないかも知れない！」

「馬鹿！わからんのか!!!!」

「彼女も、そして彼女の娘たちの人生も!!

まだまだこれからだろ！

泣いている少女一人救えず！

悔いている女性一人救えず！

何が宇宙の騎士だ!!!」

「虚数空間だろうが不治の病だろうが!!

ボルテッカでぶち壊してやる!!」

「^{テッカマン}宇宙の騎士を舐めるなよ!!」

ザザッ!!

「ハッ!？」

目を覚ます。

ここはどこだ。

ぼやける視界。目をこすりながら辺りを見渡す。

自分は虚数空間の中に落ちて……。

そういえば、何か鎧に包まれた二人の騎士のような人間を見た気が

……。

そこまで思考を巡らせると、視界の端に、鮮やかな金が見えた。

「……母さん？」

もう熱は大丈夫なの？」

はつきりと明るくなった視界。

金色の持ち主がこちらへ心配そうな視線を送っていた。

「……ふえ、ふえいと……？」

「うん、なあに？母さん。」

あ、待っててね、姉さんを呼んでくるから。

おとなしく寝てて？わかった？」

甲斐甲斐しく自分の世話を焼くフェイト。

よく見れば、ここは自分のベッドだ。

枕元には水をはった桶があった。

ふと下を見ると、濡れたタオルが布団に落ちている。

べつやら額に置いてあつたらしい。

「ママー!!」

「あり……しめ……?」

懐かしい金髪。

そして、鈴を転がしたような音と共に飛び込んでくる小さな体。

「元気になってよかったあ!ね、お出かけしよお出かけ!」

「ダメだよアリシア……母さんまだ病み上がりなんだから……」

あんまり無理しないでね。と、フェイトはプレシアの手から額に乗っていた布を取ると、桶に浸し、そのままプレシアの額に手を当てる。

良く見れば、二人共お揃いの水色の服を着ていた。

とても似合っている。素直にそう思った。

「うん、熱はもう下がったみたいだね」

につこりと自分に笑顔を向けてくるフェイト。

その笑顔は本当に幸せそうで、昔のプレシアならいらつき、鞭をお見舞いしていただろう。

しかし、このプレシアは違うのだ。

フェイトへの愛に気付き、もう遅すぎると知りながらも、愛娘達を想いながら沈んでいったプレシア。

「……………っ」

気が付けば、二人を抱きしめていた。

涙が止まらない。何が起きたのかはわからない。

これが現実なのか、これが夢なのかすら定かではない。

たとえ夢だとしても、やり直せるのだ。
アリシアがいる、フェイトがいる。
こんなはずじゃなかった世界は消え失せ、ハッピーエンドが、目の
前に。

「母やんこ。」

「ママママ。」

きよとんとする愛娘二人に、プレシアは涙を流しながら言う。

「愛してるわ……アリシア、フェイト。」

その顔は、まさに母の顔であった。

$\left[\begin{array}{c} 1 \\ \vdots \\ j \\ \vdots \\ 1 \end{array} \right]$

v
 U